

3 竪穴住居跡の埋没過程からみた松尾頭地区の土地利用について

埋土の分類

埋土は次の3点に分類が可能。

A類：ロームブロックが多量に含まれる

B類：褐色系の土で、ロームブロックはあまり含まれない

C類：黒褐色系の土で、ロームブロックはあまり含まれない

ソフトX線分析の結果から、A類は人為堆積、B類は自然堆積、C類は土壌化した土であり、周辺から流れ込んできた土と考えられる。

埋没パターンの分類

床面に堆積する埋土の違いから、大きく3類に分類が可能(～類)、・類については、埋土の組み合わせから細分が可能。

【大分類】

類：床面にA類が堆積

類：床面にB類が堆積

類：床面にC類が堆積

【細分】

A類：床面から検出面までA類が堆積するもの。上層にA類以外何も堆積しないもの(A) B類が堆積するもの(A) C類が堆積するもの(A)に細分。

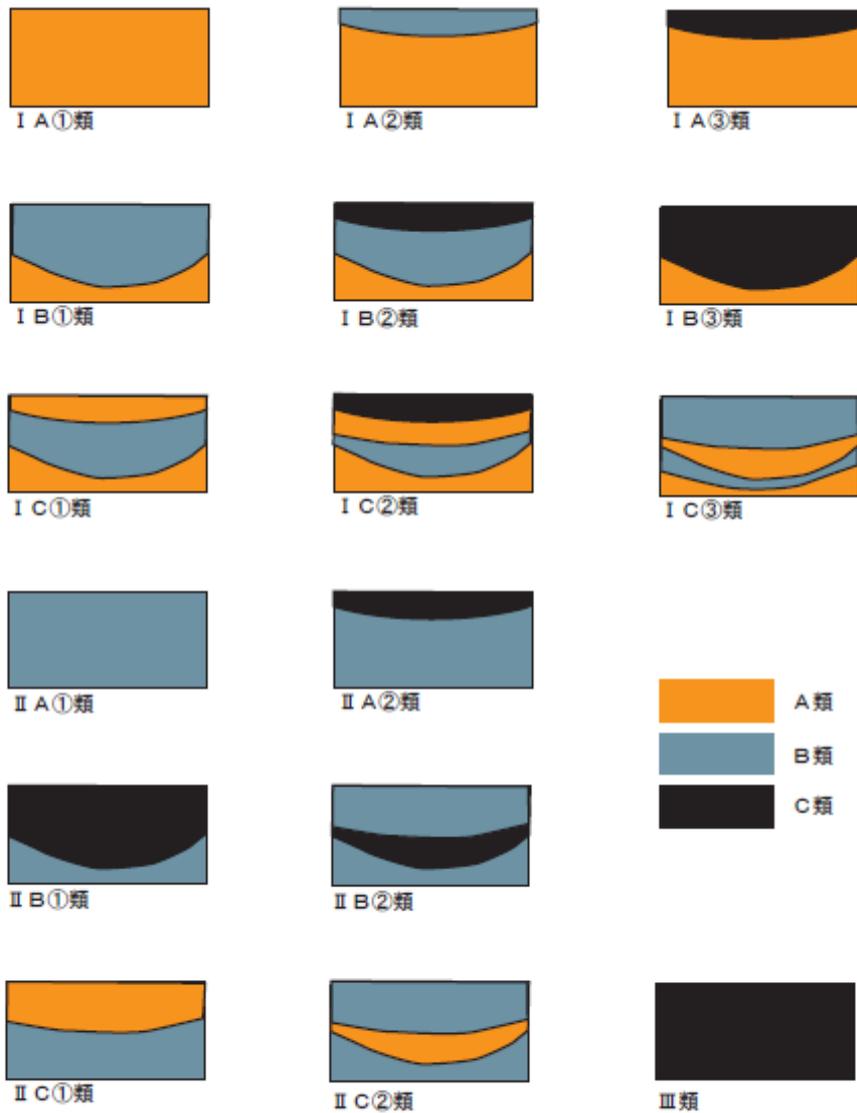
B類：床面から下層までA類が堆積し、上層にB、C類が堆積するもの。上層にB類のみが堆積するもの(B) B、C類の順に堆積するもの(B) C類のみが堆積するもの(B)に細分。

C類：床面から下層にA類が堆積し、BまたはC類が堆積し、さらにA類が堆積するもの。上層にA類が堆積するもの(C) C類が堆積するもの(C) A、B類が互層状に堆積するもの(C)に細分。

A類：上層ないし検出面までB類が堆積するもの。上層にB類以外何も堆積しないもの(A) C類が堆積するもの(A)に細分。

B類：床面から下層にB類が堆積し、上層にC類が堆積するもの。上層にC類のみが

堆積するもの（ B 類）、C、B類の順に堆積するもの（ B 類）に細分。
 C類：床面から下層にB類が堆積し、上層にA類が堆積するもの。上層にA類が厚く
 堆積するもの（ C ） A類が薄く堆積し、B類が堆積するもの（ C ）に
 細分。



竪穴住居跡の埋没パターン

各類型の状況

- (1) A、C、D、E、F、G、H類：完全に埋め戻した竪穴住居跡。
- ・ A、C、D、E、F、G、H群に分布。
 - ・ 建て替え前の竪穴住居跡と廃棄後建て替えが行われない竪穴住居跡に見られる。後者はC～H群に認められる。
 - ・ 3以降に認められ、C～H群に分布する。
- (2) B、I類：部分的に埋め戻した竪穴住居跡。埋め戻し後、しばらく窪んでいたと考えられる。
- ・ A～I群に分布。B～I群が分布の中心。
 - ・ B類は後期中葉から見られるが、後期後葉以降、顕著に認められる。B類は後期後葉から、I類は終末期以降に認められる。
 - ・ 上層に堆積するC類からは、古墳時代以降の遺物が出土することから、B類はC類に比べて窪地の期間が長く、I類はさらに長かったと考えられる。B類は住居群の最終段階のものと考えられる。
- (3) C、J類：部分的に埋め戻した竪穴住居跡。しばらく窪んでいたが、窪地に周辺の遺構の廃土を捨てた、あるいは廃土が転落してきたものと考えられる。
- ・ D～I群に分布。
 - ・ 後期後葉以降に認められる。周辺に同時期ないし、それ以降の時期の竪穴住居跡が分布。
- (4) A、K類：自然堆積と考えられる。
- ・ A～J群のすべてで認められる。
 - ・ 古い時期の竪穴住居跡、新しい時期の竪穴住居跡で認められる。また、集落が比較的短期で終わるA、J群で多く見られる。
 - ・ 住居廃絶後、しばらく窪んでいたと考えられる。C類に比べ、C類が上層に堆積する類は長い期間窪んでいたと考えられる。
- (5) B、L類：自然堆積と考えられる。
- ・ A、D、H群に分布。
 - ・ 後期後葉以降認められる。L類は古墳時代以降に認められる。
 - ・ L類は埋没中に一端堆積が止まり、土壌化したと考えられ、堆積環境の変化を示していると考えられる。
- (6) C、M類：埋没過程にある窪地に、周辺の遺構の廃土を廃棄したものと考えら

れる。

- ・ A、B、F、G群に分布。
- ・ 後期前葉から認められる。周辺に同時期かそれ以降の時期の竪穴住居跡がつくられており、窪地となった箇所には遺構の廃土を埋めた、あるいは廃土が転落してきた可能性がある。

(7) 類：古墳時代以降に多く認められる。

表1 埋没パターンの推移

	～ -1	-2	-3	期	古墳前期	後期以降	不明
A群	A類：6 C類：1	B類：1 A類：4 B類：2	A類：1 A類：3		C類：1 B類：1		A類：6
B群			C類：1	C類：1			
C群			B類：1	A類：1 B類：1 C類：1	類：1		A類：1 B類：1
D群			A類：2 B類：1	C類：1 B類：1	B類：1		
E群		A類：1	A類：1 C類：1 A類：2	A類：4 C類：1 A類：1		C類：1 類：1	A類：2 A類：1
F群		B類：1 A類：2	A類：3 B類：1 A類：2	B類：1 C類：1 A類：1 C類：1	B類：1		A類：3 B類：1
G群		B類：2 A類：1	B類：1	A類：2			
H群		B類：1				A類：1 B類：2 C類：1	
I群	A類：2	A類：2	B類：5 C類：1 C類：1	B類：3 C類：2 A類：2			A類：2
J群			A類：3	A類：8 類：1	A類：1	A類：1	A類：4

松尾頭地区の土地利用について

- ・ 竪穴住居跡を埋め戻す行為は後期後葉から多くみられるようになる。
- ・ 埋め戻しの行われる竪穴住居跡は、C～I群で多く認められ、他はあまり認められない。このことから、竪穴住居跡がつくられる場所によって、土地利用の在り方が異なっていたと考えられる。
- ・ E、F群で竪穴住居跡をすべて埋め戻すものが多く認められることから、この部分は遺構密度が高いこと、比較的長期にわたり竪穴住居跡がつくられていることから、竪穴住居跡の密度が高く、比較的長期にわたり竪穴住居が分布場所において、埋め戻しが行われていたと考えられる。
- ・ 後期中葉までは A類が認められないことから、竪穴住居跡がつくられていた場所に窪地が分布していたと考えられる、後期後葉以降は A類がC～G群にかけて認められることから、A、I、J群に窪地が多く分布していたと考えられる。
- ・ 竪穴住居跡の埋没過程で周囲に遺構が形成される場合、遺構の廃土を窪地に捨てていた可能性がある。
- ・ 竪穴住居内に黒褐色土が厚く堆積している場合、長期間窪んでいたと考えられる。